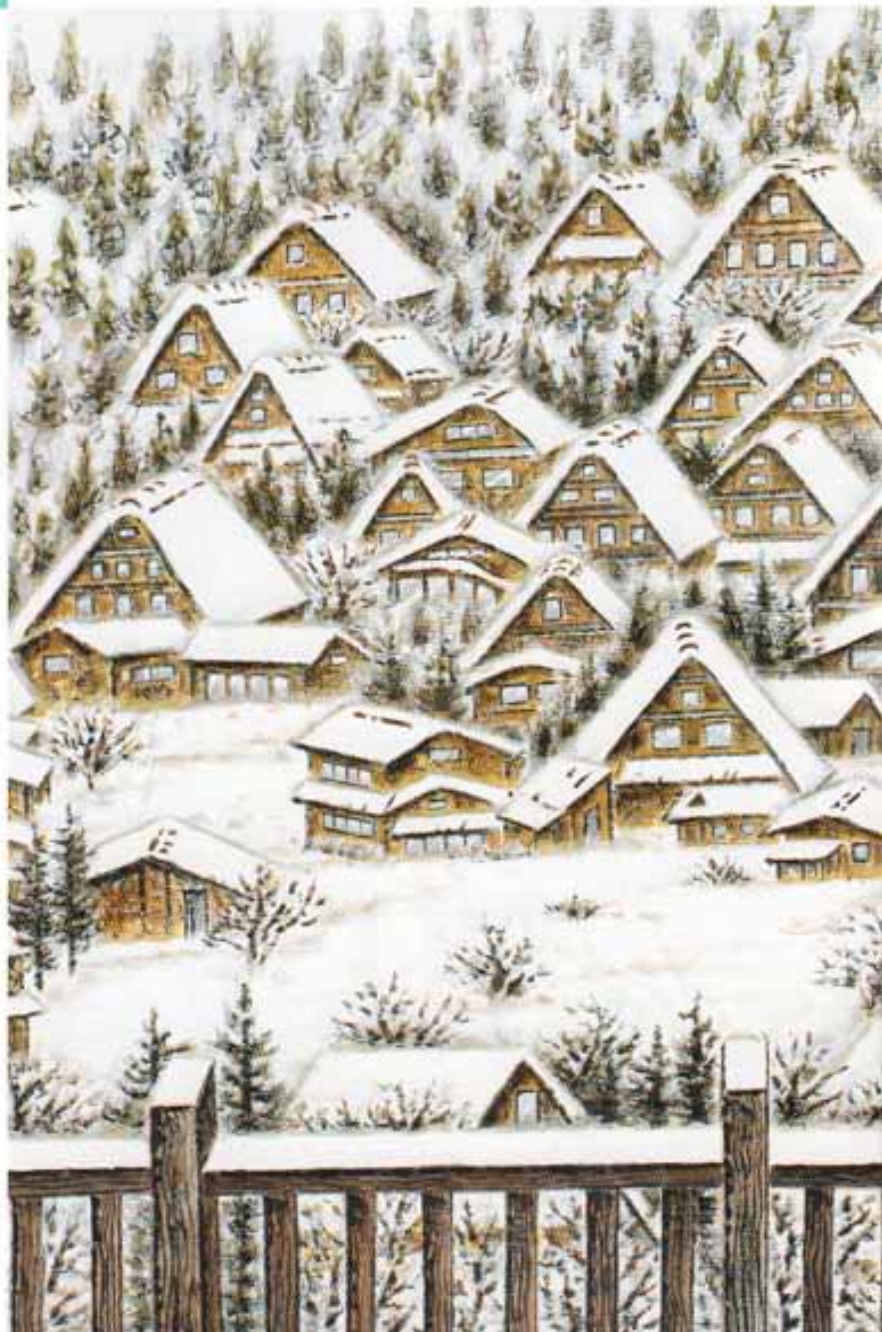


冲

2
2021

创刊号(总第32卷)



折角の雪

能村 研三

掌中の珠

色尽し果てたる紅葉雨を待つ

ひと雨のありて杉山紅葉山

雪吊に折角の雪授かれり

吾のたてし音にたぢろぐ霜夜かな

のし餅を切る役失せて家長たり

省略の過ぎしと思ふ裸木よ

惜しむべき年ならねども年惜しむ

謀りごとめきたる鮓鰯鍋囲む

したたかに時疫を抜けて年送る

禅林の青竹伐るも年用意

昨年の暮、やっと原稿も一段落したので、コロナ禍でのまたとない巣籠りの期間を使って、書庫の整理にとりかかった。私の書庫は書齋の奥の部屋で、階下の第一書庫には主に先師登四郎の蔵書、第二書庫に「沖」関係の図書が収蔵されている。この書庫も足の踏み場もなく、床に平積みで置かれる本もたくさんある状況であった。

昔、林翔先生の書齋にお邪魔したことがある。先生は整理の達人で、五十音別に著者ごとの句集を並べ、どんな時でも必要な本が取り出せるように整理されていた。だからと言ってそんな整理の仕方はすぐにできる筈もないので、今回は簡単に大方の片づけをして、次の機会を待つことにした。

この他に、登四郎が昔から大事にしていた軸や額、色紙、短冊など、あちらこちらに分散されて置かれていたものを一堂に集め、それぞれに番号を付して台帳に索引を作り、その内容を記すことにした。

その折、かつてから探していた軸がみつかった。それは登四郎が俳句の手ほどきを受けた伯父山本六丁子（曾良の随行日記を発見した人）の遺品として譲り受けた「曾良の軸」である。

曾良の筆による色紙の軸で、見事な朱色のもので「奥の細道」の象潟の一節「北海の荒磯に：」という文があつてへ波越えぬちぎりありてやみさごの巢」という句が美しく書かれている。

もう一つ登四郎が大事にしていたものに「笠翁の芭蕉像」がある。これは芭蕉門の一人で俳人であり漆芸家の小川破笠（おがわはりつ）の作によるもので、面長な顔は素焼のまま、眉は太く秀でてしずかな威厳に満ちた芭蕉の像で、三十六体造られたものの一つと言われる。

今年も登四郎生誕百年、没後二十年でもあることから、このたび見つかったものも何かの機会に公開していきたいと考えている。

能村 研三

鬣のやうに衿立て人を避く
網元の不漁を託つ枯木星
明王の木彫りの火焰冬ざる
猪鍋の次第に肩の勇み出す
短日を削ぐ鈍色の彫刻刀
たらればの悔い多き日や虎落笛
厳格に程とほき父花八手

今年はここ三年程の暖冬と違って寒く雪も多いと言う。既に昨年末に日本海側が大雪となった。登四郎先生の『冬の音楽』という句集に〈雪降りぬ忘れるほどに遠くの日〉という句がある。この句には、今眼前に雪が霏々と舞っているのか、雪が降り積もった状態なのかという点と、「遠くの日」が雪の記憶を掘り起こしているのか、雪を前にして遠い日の出来事を回想しているのかなどと、いろいろ考えさせられる。

私の勝手な解釈と思い入れであるが、降りしきる雪を見つめながら、先生の遠い日の忘れ得ぬ想い出に耽る姿と思いたい。雪はしんと降るとよく言うように辺りが無音と化し、遠くの景色を遮るようになるのんと降る。物静かな心持で窓辺を見つめる姿、雪にはもの思いがよく似合うのである。

蒼茫集

わたしは貝に

千田 百里

霜月の詩の蓄への負数かな
*神還るわたしは貝になる日和
憂国忌夜の木枯の突き止まらず
年暮るる採血の腕遠く置き
年の尾を踏んで右足左足
初春の茶柱やわが心の帆

はらはら

辻美奈子

*さざんくわのはらはらと泣きはらすかな
凍滝に残響の青ありにけり
天地創造動かざる冬の亀
らふそくに霜夜の芯の残りをり
聖夜この魚の鱗のかがやける
せはしなく包みくれしよ飾売

秒針の速さ

細川洋子

山茶花のひやびやと散り重なりぬ
けんけんば飛ぶ間も散りし姫椿
駆け降りる導線 蔦紅葉かな
秒針の速さ 勤労感謝の日
*安居正浩 酔豚 定食冬の月
冬はつとめて 校正の充血目

初日

甲州千草

*喝采の心どこかに 黄落期
高き炎の音 呑む空や 牡丹焚
都会へと人流れ 水涸れにけり
飯台の籠の光や 年詰まる
十二月瓶に列なす 棒野菜
路面まだ 載らぬ 橋桁 初日 受く

数へ日

大沢美智子

*冬を愛しめと 翔先生の忌なりけり
森は語り部しづけさに 積む枯葉の香
軒下に 割積み の 薪 獵期 来る
綿虫や アイヌの 小 さ き 手 織 機
白鳥 一陣綿のごとくに 田に 眠る
数へ日の 職人 溜り 浅草寺

一茶忌

埴誠一郎

*美田なく 美学わづかに 一茶の忌
雪もよひ 金泥 紺紙 一切経
自適てふ 孤独 愉しみ 枯木道
真空管 ラジオを 叩く 開戦日
唐辛子 揺れ 原色の中 華街
雁渡し 藻塩の街の 常夜灯

真帆 安藤しおん

けふの無事愚直に煮詰め柚子三顆
風に芯緋蕪緋の散る輪切干
* 雪吊の真帆きら星とピチカート
濃く淹れし茶銘は長寿暮易し
マスク越しだんだん悲しくなる喜劇

かき玉椀 小林陽子

ベテルギウスの赤き弱光憂国忌
寒晴や飴切る音の尖りくる
* かき玉椀とろりと風の三の酉
踊り出しさう月光の枯木立
流れゆくガラスの帆船冬銀河

魍舟 栗坪和子

人影のありてさみしき秋千濁
* 草の花牝牛は母となるかたち
一葉忌文机といふ暗きもの
小春日や広重行徳帰帆の囃
魍舟舟底擦つて戻りけり

発心のいろ 高久正

翳りきでいる鮮やかな冬紅葉
こーんと鳴く障子に影の指きつね
碧水の湖を鏡に冬紅葉
* 発心のいろのくれなゐ冬木の芽
午後の日の移りしところ葉鶏頭

眼鏡 清水佑実子

残照のロックフィルダム山粧ふ
なじみたる眼鏡勤労感謝の日
* 落花生のくびれ二人の距離保つ
指切りを覚えてくれし聖夜かな
冬紅葉言葉尽して別れけり

冬木立 小坂尚子

木枯の吹きこぼしたる夕日かな
冬星やけものは爪を眠らせて
雪ぼたる木立の奥の明るくて
日輪の中より零れ寒雀
* 遠きほど星と触れ合ふ冬木立

リリーマルレーン 井原美鳥

稀といふ霜海女の畑にも
* 葱畑の葱直立をこころざす
猪狩の山にひねもす風の笛
リリーマルレーン冬薔薇の名を問へば
たがへなく鳶を点じて初御空

漆椀 古居芳恵

* 京人参花のかたちに漆椀
散紅葉かぜの渦なす駒返し
孟宗の百を灯して里神楽
若いてふ動体視力獵期来る
咳き込みて百の眼差し浴びにけり

山眠る 鈴木光影

牡蠣しるく震へて唇に迎へらる
根元よりスカイツリーの枯れておし
黙禱の空ろの背に山眠る
白猫のひなたひろげて日向ぼこ
* 冬銀河みな沈黙の言葉持ち

連写音 本池美佐子

シーソーに一人と二人冬ぬくし
夕暮や水面を走る鳩の笛
* 寒波来るびんと張りたる水平線
滑空の鷹追ひかくる連写音
漆黒の海に傾れて冬銀河

沖作品



能村研三選

そこはかと後山より笹子鳴く

千葉

平嶋 共代

* 鴨の声水尾広げつつ重ねつつ
外堀の枯れて銀色葦の原

牡丹焚くほのほに今し夜の帳
寒天へ九輪調ふ多宝塔

栃木

五十畑悦雄

ふかふかと甘き匂ひの干蒲団
十二月八日わだつみの茜雲

未枯れゆく庭を彩り実万両
何か忘れ何か追はるる年の暮

市川市

澤田 英紀

* 一条の曙光あまねく初山河
三の酉火消し車の荒々し

値切る分祝儀となりし酉の市
散紅葉風の画伯の貼り絵めく

* 冬夕焼海に隙なく波の綾
劇中の余韻月冴ゆ丸の内

雪螢とらへどころのなき記憶
羽衣のやうな百幹冬ざくら

愛知

鳥居 公子

* しろがねの風が風追ふ枯尾花
坊守の箒寝かせて焚火守る

瑞籬の午下の日を吸ふ冬の蜂
冬火花跳ねて星座の下り来たる

神奈川県

加賀 荘介

* 小芥子ひとり連れて帰らむ雪の町
鼻にギアある頸の回しやう

夢に笑ひ湯たんぽたふりたふりかな
鮫鱧曳く手鉤の女眉細し

千葉

水谷 昭代

* 冗談に本音紛らせおでん鍋
枯れ切つて水面明るき枯蓮田

蒲団干す幸せ夫ありてこそ
そのままに落葉は虫の寝床かな

* 雲間より光芒奔る神の旅
老桜の紅葉かつ散る数寄屋門

無患子の空は底なし波郷の忌
思惟仏の指おく頬や冬ぬくし

柵を払ひ切つたる冬木の芽
大和ことば選りて紡いで年新た

熊本

牛島 晃江

* 極東の日出づる岬淑気満つ
平らかな師の目尊ぶ恵方道

濃淡の墨が匂へり雪中花
冬鳥の鋭声一つに発てりけり

埼玉

浜田はるみ

桐の実の真下は風の鳴るところ
稲刈つて地平線まで晴れ渡る

空に淡く月のかけらや蕎麦の花
どんぐりの青き尖りをポケットに

千葉

木 和江

* 木の実独楽回れ地球と水平に
* 隠沼の水底美しき色紅葉

本堂へ結界幾重曼珠沙華
野菊咲く灯台めぐる遊歩道

* 大漁の帰船の艦の冬帽子
冬風や九十九里浜一望す

清部 祥子

無住寺に読経のごとく黄落す
沈黙のダム湖彩る冬紅葉

冴ゆる夜の我が靴音の我にくる
枯れしもの枯れゆくものに人の黙

* 枯蓮いのち全うせしかたち
* 花石路や光の中の一行詩

熊本

石橋みどり

がつちりと家族の絆神の留守
貫いて根にある力枯芭蕉

今生をこの地に埋め枯芭蕉
繋がつて良き師よき友鳥瓜

市川市

松丸 佳代

蔵店の梁の太さよ菊香る
木道のきらめく霜を踏みにけり

* すつぱりと二階屋つつむ蔦紅葉
* 刈田越し鋼色なる筑波山

千葉

浜崎喜美子

* 絵本読むそれぞれの背にクリスマス
茶の花や鐘の音ひびく峰の坊

西の市威勢良き声対を為す
洛西の深山の伽藍散紅葉

* 海霧の玄界の島浮かせたり
絶え間なくトレモ口で散る黄葉かな

* 昂中 天寒木の 吃立す
名も知らず会へば会釈や冬あたたか

飛鷹選評



能村 研三

鴨の声 水尾広げつつ重ねつつ 平嶋 共代

鴨の群れが渡つて来た。首を埋めて丸くなったまま漂っている浮寝鳥もいれば、気持ちよさそうに水面を泳ぐ鴨もいる。突然水音がして羽ばたく鴨もいる。水面を滑るように泳ぐ鴨の水尾はきらきらとした音と光を紡いでいる。「広げつつ重ねつつ」という畳みかけた描写がこの句の眼目である。

何か忘れ何か追はるる年の暮 五十畑悦雄

一年の締め括りである年末になると、仕事や暮らしの面で忙しく身体がいくつあつても足りないほどになる。一方、さまざまに思いにとらわれて、精神面でも落着かない。数え日を計画的に使っているつもりでも、何かを忘れてしまう。とにかく何かに追われながらも気忙しい年の暮は過ぎていく。

散紅葉風の画伯の貼り絵めく 澤田 英紀

秋の野や山を彩った紅葉は、冬に入ると鮮やかな色のまま散り始める。真つ赤なままの葉が日ざしを浴びて舞う姿は艶やか

で美しい。お寺の広場の石畳であろうか。自然がなせる技なのか、まるで風の画伯が設えた芸術作品のようにも見えてきた。「風の画伯」の比喩が面白い。

しろがねの風が風追ふ枯尾花 鳥居 公子

作者は愛知支部で古くから勉強されている人。芒が枯れてくると、秋がぐつと深まった感じがする。穂が散つて、芯だけになった芒を枯芒というが、やや侘しすぎる感もある。それに引き換え「枯尾花」は美しい表現である。芒の穂には銀色の輝きがあるが、これを「しろがねの風が風追ふ」と美しく表現した。

梟にギアある頸の回しやう 加賀 荘介

梟の首は回転する。梟は首の骨、頸椎がたくさんあつて、二百七十度は回転できて、首を回転させるだけでなく、脚は動かすだけずらして見たいものを見たりもできる。頸にギアがあると見た見方は面白い。

枯れ切つて水面明るき枯蓮田 水谷 昭代

夏の爽やかで華やかな姿はすっかり影をひそめ、水面にうなだれて広がる荒涼とした褐色の蓮田の光景は、残骸のようで痛ましく哀れである。しかし、ほとんどが枯れ尽くしむしろ明るい水面をのぞかせ、輪廻転生のさまを見る思いである。

雲間より光芒奔る神の旅 里村 梨郵

夕焼け空の雲間から射す力強い光芒、素晴らしい光景で、何か神が降臨してくるような神々しきを感じる。諸国の神が出雲の国に集まるため旅立たれたのであろうか。